

No 14521

特 60
428





逞意 謾說 羣盜 術



力挽金暉
用鎗落





盗賊の跡戸
 おく家さるふこ
 句のへは強盗も改



されば數島の徳ふ
 盗人も心も和らけうた
 あしもあると子れるふ
 されていごは改心まる
 りし彼の強賊の石川五右衛門
 うその悪事とバウのあまは
 表江に住居を
 浪人京家の

古歌み詠
 る言の葉も
 我う身思ひこころりる年の生立
 父おくれ母の胎内たりし頃
 故有て京都と出て譜代の丁部



けつ二歩
 もあや
 るのぐ
 難渋
 供るる下部
 五右衛門
 主人の心許るく薬
 買は立戻る跡

婦
 乳の下深
 色おけるおひん
 のこと思ひ
 彼の
 金子
 石奪ひ往
 せしき向う



一人苦一みる
 うん有りお社堂
 の縁まひれふ一居り
 人此休を見ておひん思ひ
 ういねうきる内おと手まこ
 りううちうへの金子は忽ち
 心動きと引出さ婦人ハ
 驚き盗賊と声と立て
 旅人ハどうきまむと腰の
 股引抜おどらんと
 けるうりようけんあやまて

七
 一人の旅人来り



くはりの
幸ひ妻は

出で大勢のりてつよく
かゝりめ石の重りも
無量の涙もみぢく
とよひませる川中へ
沈めて山内へ帰
捨岩ハ
ふーまよ水
あかりけれハ
五の支んじり
ふんぬの



リーの
曲者八
ヤ一で
行ける
婦人の
切口
生れ
子の泣

五右門

おびんお田ひ
婦人の着る衣
服
乳汁出けれも養
育一捨右と名づけ
母の昔堤
これと住寺は頼
随ひ明友は何事
りける申年思
うこれと妬捨



●異見を
 平九と
 きり入
 札ぬ
 故せ
 んん
 如思を
 置下
 定めて
 困りて
 心せ



女心の一もふ
 思ひもか
 里方へ入り
 一に五右衛門
 中政心の
 新しき
 縁を
 ける五右衛門
 五郎市と相争
 と思へとも
 妻のりれ不自由
 うちへ祇園町
 石川と、楊枝を身



重吉の石をい
 りん手はてしなく
 度への木大なる
 しとれんまうりし
 くつしつたはねる
 けすくす

●異見を

平九と
 きり入
 乳故
 故せ
 んく
 幼旧を
 置て出
 定めて
 困りて改
 にせん



よからぬ事のと見
 しひ人の目さす
 盗
 こそハな一たり
 ち段々暮る
 思事の手先
 終ふ仲間のいのちまで
 嘆きしきりて祇園の茶屋のまき
 こへるを妻のあけけるのほど
 多く一子を故けそ名ハ五
 郎市と
 郎市と
 ころに妻のあけつはいつ
 の事とまを咲りいろとことよよとへ

五

女心の一もふ
 思ひとが
 里方ハハリ
 一に五右衛門
 中改心の
 氣しとまへつ
 ひ離縁とまへし
 けける五右衛門
 ハ五郎市と相手を
 こそんと思へどゆ
 妻のるりれ不自由
 うちへ祇園町る
 龍川といふ橋を身



小雀
 推ふ
 ろく
 い
 まへ
 お
 と
 千下
 女
 瀬
 と
 ま
 泰

小雀
 推ふ
 ろく
 い
 まへ
 お
 と
 千下
 女
 瀬
 と
 ま
 泰

外の幸
 親
 其
 下
 其
 泰



後の妻
 小ま
 子の五
 門
 出
 今

後の妻
 小ま
 子の五
 門
 出
 今

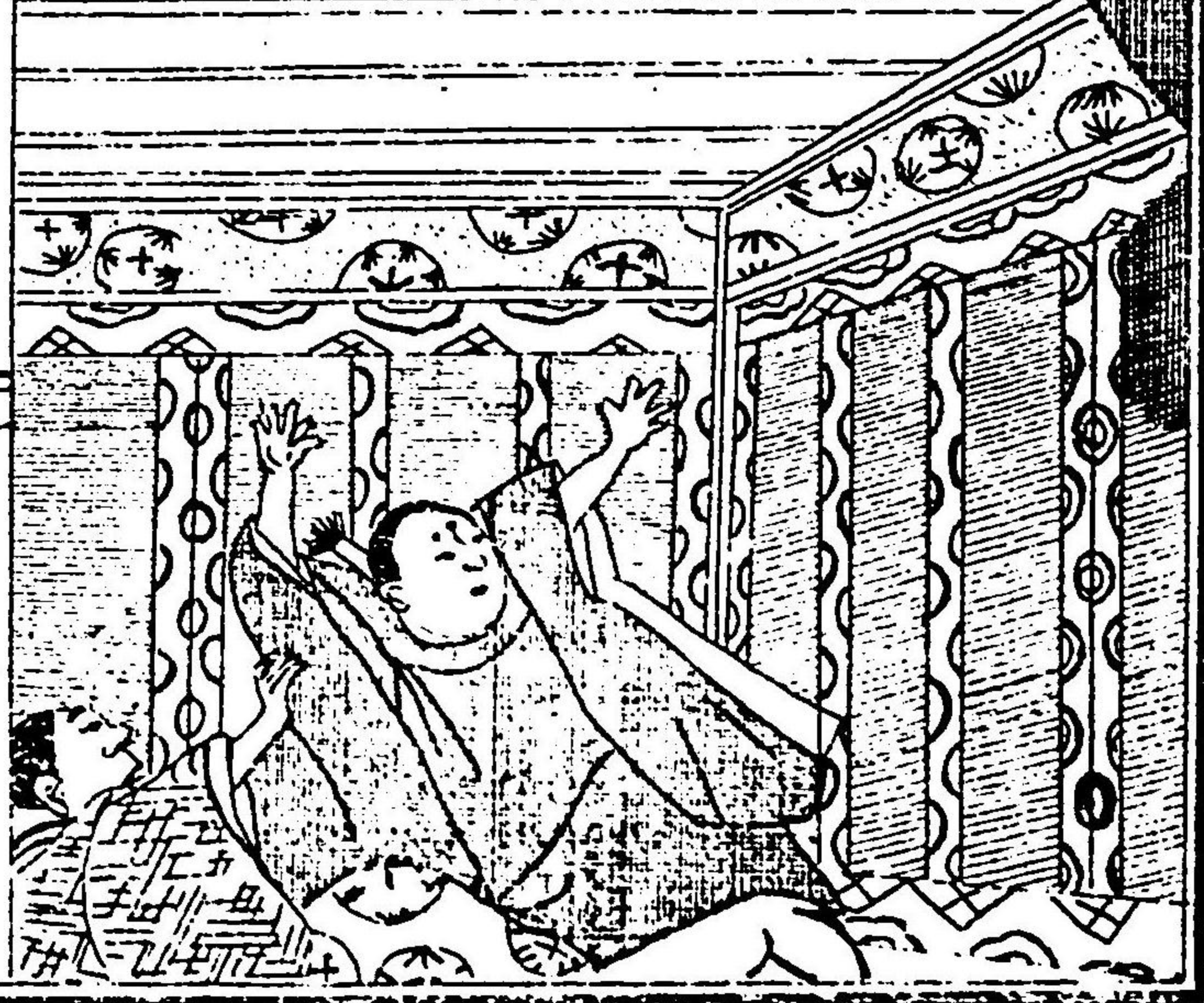
後の妻
 小ま
 子の五
 門
 出
 今

口ひとり針仕事して
唇を研へて乳をまと手
うち各
さへ泥よ



小舞
の源
五郎
稔
寺港
むらの
丸
懸幕
滝

一のけれは小舞の源の源
さばい人と思ひこの源の源
五右衛門の懸幕の源
又町せられ腹いんと身
と捨ての源の源の源
夫の身と大事とちもい
めまの源の源の源





右工門公孫て
 心を掛一十鳥の
 香煙を奪んと彼の
 妖術あてるんあく御殿悉び入り
 持て来る一いなる
 可なり
 の鐘
 を授け
 香炉の音を止め
 奪いし御殿は殿居の仙石

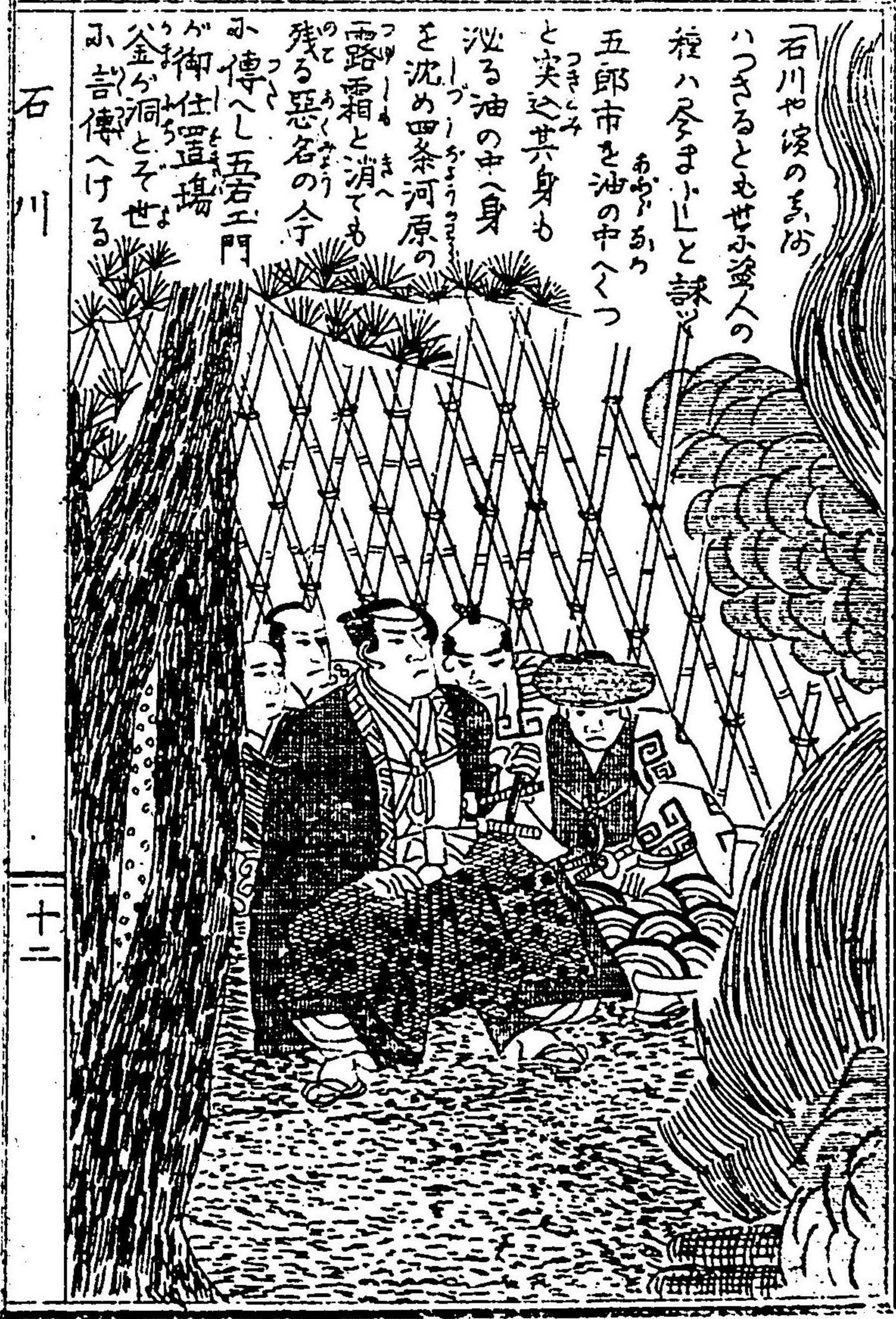
●久秀の足をふか
 一破よりぬち

行人と評
 儀ありし
 五郎市
 いらふも強敵の五右
 工門ふれバとて金い
 りの利小定より京都四条河
 原ふて廣く矢来を誑廻し
 其中に掛一大金の
 中は油を必しせけり頼て
 入よりい五右工門伴五
 郎市西人纏ふりり
 矢来の内へ引立来り
 罪の次第を言さる
 其上にて油の中へ押入れ



小舟打赤び曉来んとて
 帰りけるまをいし其た
 忍び来てとたこいふま
 五郎市尹の難
 儀と救とんと
 障子越えし小舟
 と刺んと突出ま
 田のお滝脇腹深
 く美貫其場

出で
 右工門
 楠綱一役中
 曲の入り
 言はし
 の侍起
 して紐付
 門の後
 起五右







コリ

十三

此の程に
 西葉の
 人綱を
 内
 余の
 びと



斯て石川五
 右工門の天
 細のうれう
 く仙石推
 右工門の為小縛
 ふつぎ終小四糸河
 原の露と消
 と豫て午下の
 中みでいがる

紫條六
 同類殿重の御探
 索めて同類の
 もの自訴す
 五右工門
 這れ居り
 此の程に
 西葉の
 人綱を
 内
 余の
 びと



御詮儀ちよふつと我
 ともく自訪せんと思
 ふまゝに汝ハ我が交りて
 世ふらり慾のもの戒
 め正直みして貪り者
 或ハ木具る者を助け
 盗ミ得る財宝を
 盗べし五右衛門主より
 譲り受へ彼の常行の
 妖術を今より汝み
 授くるる夢く人よ
 語るこころわれ
 とくこくいまりめ

伊達天五郎



置それより自訴
 とぞるしたりける
 みま々慶形み行
 くれける
 其後五
 郎父の
 遺言を
 どん慾み
 不義の仕買ある
 家おハ忍ひ入りて金銀
 財宝と掠め取り不幸みして貪
 けきものは是を施りくくして年

築紫権六

石リ

十四



御詮儀ちるふつと我も
 ともく自訪せんと思
 ふちり汝ハ我ハ交りて
 世みこり慾のものを戒
 め正直ふして金具し者
 或ハ木具るる者を助け
 盗ミ得る財宝と
 ふべし五右衛門主より
 譲り受し彼の常行の
 妖術を今より汝ハ
 授るる夢く人
 語るこころうれ
 とくくいましめ

伊達天五郎

●月を經るまじ
 五日の夜に
 成る館ふ入能と傳
 物やあふと四方を見
 又ある枝石田



置直それより自訴
 とそるしたりける
 みま々慶形ふ行
 クれける
 其後五
 郎ハ父の
 遺言を
 どん欲心
 不義の七具ある
 家ハ忍び入りて金銀
 財宝と掠め取り不幸ふして貪
 けきものハ是を施して年

築紫権六

酒の黄をく
 小瓶の徳
 利ありし外
 ふも願公の
 の徳
 と見たと
 五郎も
 好める
 西ふし

石リ

四

あれは何が以てたまるべき能もの
 得たりと有る茶
 確みまゝのて
 とつらぎ呑み
 拵多寒
 夜
 みこ
 きま
 れハハ地
 もあふたこれと
 忘れのさハ吞と吞て
 うくさるうちいつく酔のいづく

五郎

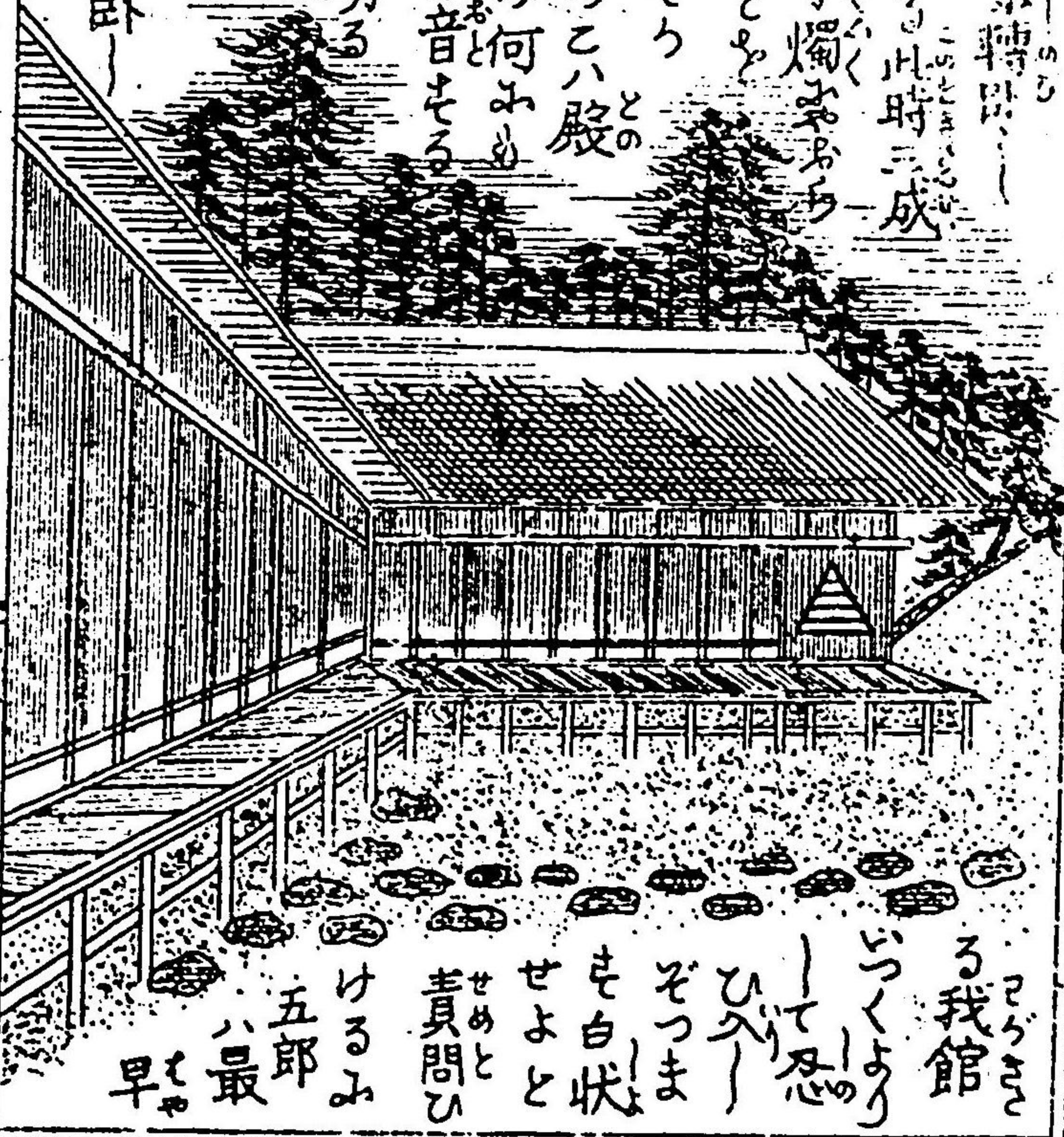
のいせき
 声は五郎の目と
 覚し遊んせ
 と三成ハ手早く
 拵の引つ
 有合帯
 て高
 手
 拵
 針あげ
 汝治い
 づくのもま
 れハハ車

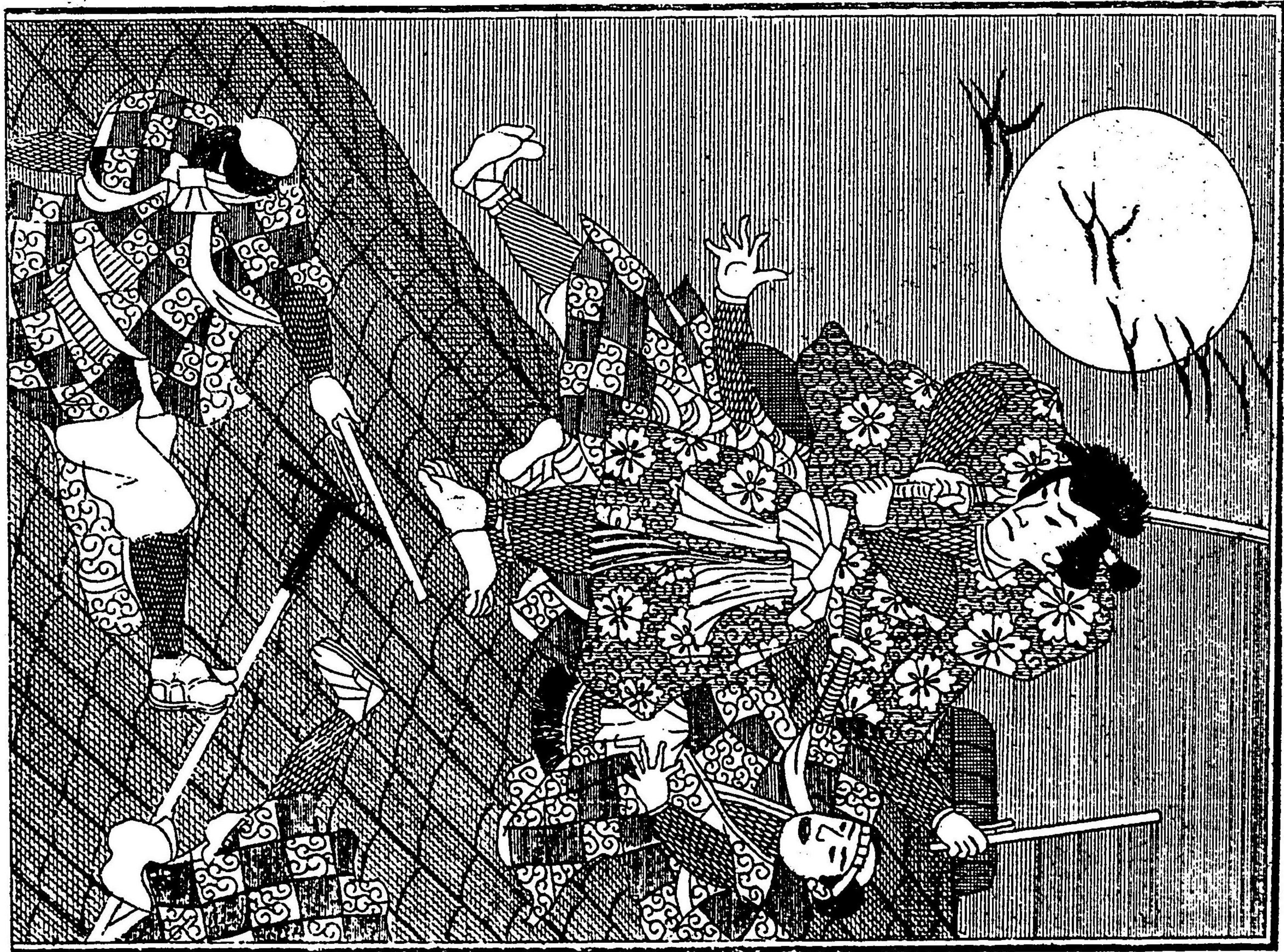


通りけれハ其俊そこ小轉
 前後生鮓るける此時三成
 うこやへ行人とて手燭
 灯をろうつーふーと
 立出るみいづくみてり
 鼻の声の聞へりうこハ殿
 居のもの眠り何み
 せよいふうーと鼻の音を
 一間の障子を引明る
 みこいそもいふ何
 入とも吹れ見るれ
 人のいづく酒を酔て臥
 居るふ已れ盗賊

十五

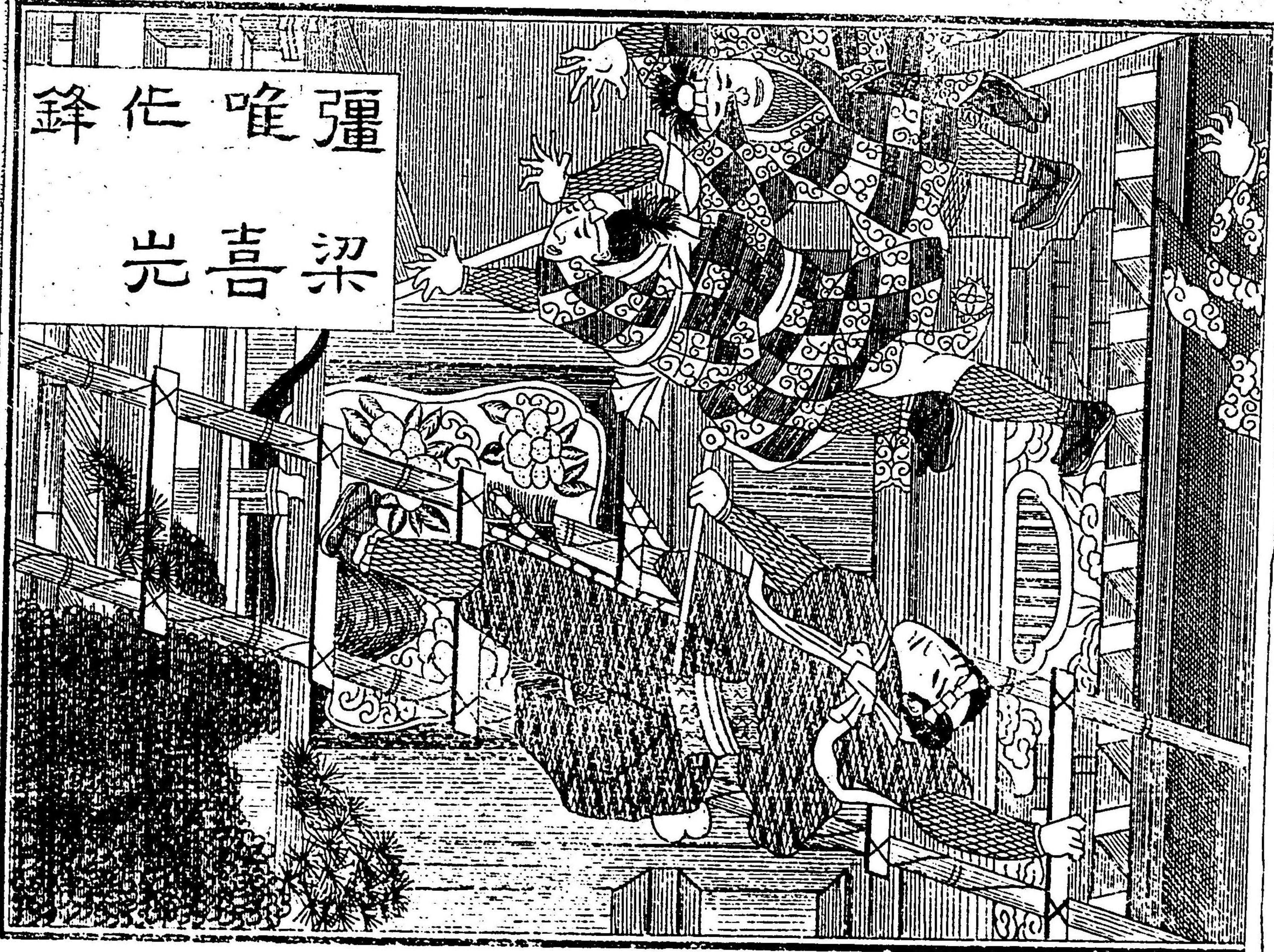
る我館
 づくより
 一て忍
 ひ入
 そつま
 き白状
 せよと
 責問ひ
 けるふ
 五郎
 八最
 早





鋒 仁 唯 彊

光 喜 梁







酒の為か思てぬ不覚と
そ取まう我のり受得
兼行の妖術よこ締り六有
ともしくも邪にまよふ
之れ一石
申此御
へさひ入
りし
願ふ
總て命
だれとてさるじれわ
せし坐をさめさるる三成
其大

見てそか悪むべ
き奴るもれ
とも我汝ふ頼
べき一義あり此
事止月ひさむ
命を助け得
と
身ふるも
事ふ
あふバ
君さし
上命
みりえ



是れ
中見悟を
定ぬめち
成上何
とち
つま
んやつれ
そ五州五石王
門の師鏡築家能ハ
子みりて
五郎
てん五郎と
るが我背む時
の

見てそか悪むべ
き奴るもれ
とも我汝ふ頼
べき一義あり此
事止月ひさむ
命を助け得
と
身ふるも
事ふ
あふバ
君さし
上命
みりえ



加藤清正

呉
よとこいふ
五郎そハ
安き事なる

五郎を見驚き
めらさるる事
と声よく聞
其威勢は恐
れん事なき
五郎を
しんてハ

と妙法の
功力は妖
術破れ進退
こふ窮
進んまれ
術ふ
けん
の妖
思ひ
おふ
う△



り我覚得
と忍びの
術ふて加藤ッ
ゆしきふ忍ひ入り
加藤の首を御土
産ふ日るうに忝上仕
らんといらへみ三成ハ
若千の金子を与へ放ちや
りける扱いどもん五郎ハその
翌日暮るを待支度とのへ宵より
加藤の館へ忍ひ入りやうそと窺ひ夜半ふ至り
清正居間なる次の間へ忍ひゆらひ寄りて一討
とがと抜立寄め其時清正もの本見て居りしう

五郎

清正ハ
の清正ハ
彼ら
し他人ハ
事と仕出
ミよる
街とたの
少の妖
盗賊よる
て押へ汝人
五郎を取
清正ハ
と妙法の
功力は妖
術破れ進退
こふ窮



兵
よこいふ
五郎そへ
安さ事る

五郎を見驚き
もろまきこと
ふらふら己丸曲者
と声とく丸ハ
其威勢も恐れ
けん歩もまむ
こと能はず
五郎をらし
まことハ
術小
けん
の妖
思ひ
と
妙法の
功方心妖
術妖丸迷
てん丸



り我見得
し忍びの
街まで加藤が
もときふ忍ひ入り
加藤の首を御土
産ふ日まうだ参上仕
らんといらへふ三成ハ
若千の金子をもと放ちや
りける扱いごとん五郎ハその
翌日替るくを待支度とのへ月よう
加藤の館へ忍ひ入りやうきと窺ひ夜半ふ至

清正ハ忍
ち五郎を取
て押へ汝人
盗賊よる
少の妖
術をたの
こまゆる
事を仕出
し他人ハ
知ら
の清正ハ
彼ら

清正ハ忍
ち五郎を取
て押へ汝人
盗賊よる
少の妖
術をたの
こまゆる
事を仕出
し他人ハ
知ら
の清正ハ
彼ら



まじして繩をも
うけきり前引付
種々説諭額
蛇の目入れ墨を
極も意見をもせし
伊達天五郎の愛も
改心るし頓て差添
放
う我と我手
髻の根より
みつと切
落我過て
とて清正の
詫けぬが清正も其

五郎



加藤清正

命ハ
をす
身は墨の夜を
着て諸国を巡り
父とてしる本門
其外中間の培堤を
早ひける其人多
世上の人呼て蛇の目
坊主といふ人
買ひ清正の徳を
世に傳へし
人の心



命ハ
 ちとす
 加藤清正
 命ハ
 ちとす
 命ハ
 ちとす
 命ハ
 ちとす

コリ

三十



命ハ
 ちとす
 加藤清正
 命ハ
 ちとす
 命ハ
 ちとす
 命ハ
 ちとす

身ハ 墨染の夜を
 着テ 諸國を巡リ
 父を 七代 五右衛門
 其外 中間の培堤を
 早ひける其ころ
 世上の人呼て蛇の目
 坊主といへり
 實は 清正が徳み化
 せしめて 悪ぶつて
 善ぶつて といふ
 この人ヲ

明治廿一年十二月二十六日印刷
全 年全月全 日出版

著者
印刷 兼發行者

竹内新助

大阪南區鰻谷西之丁卅三番地

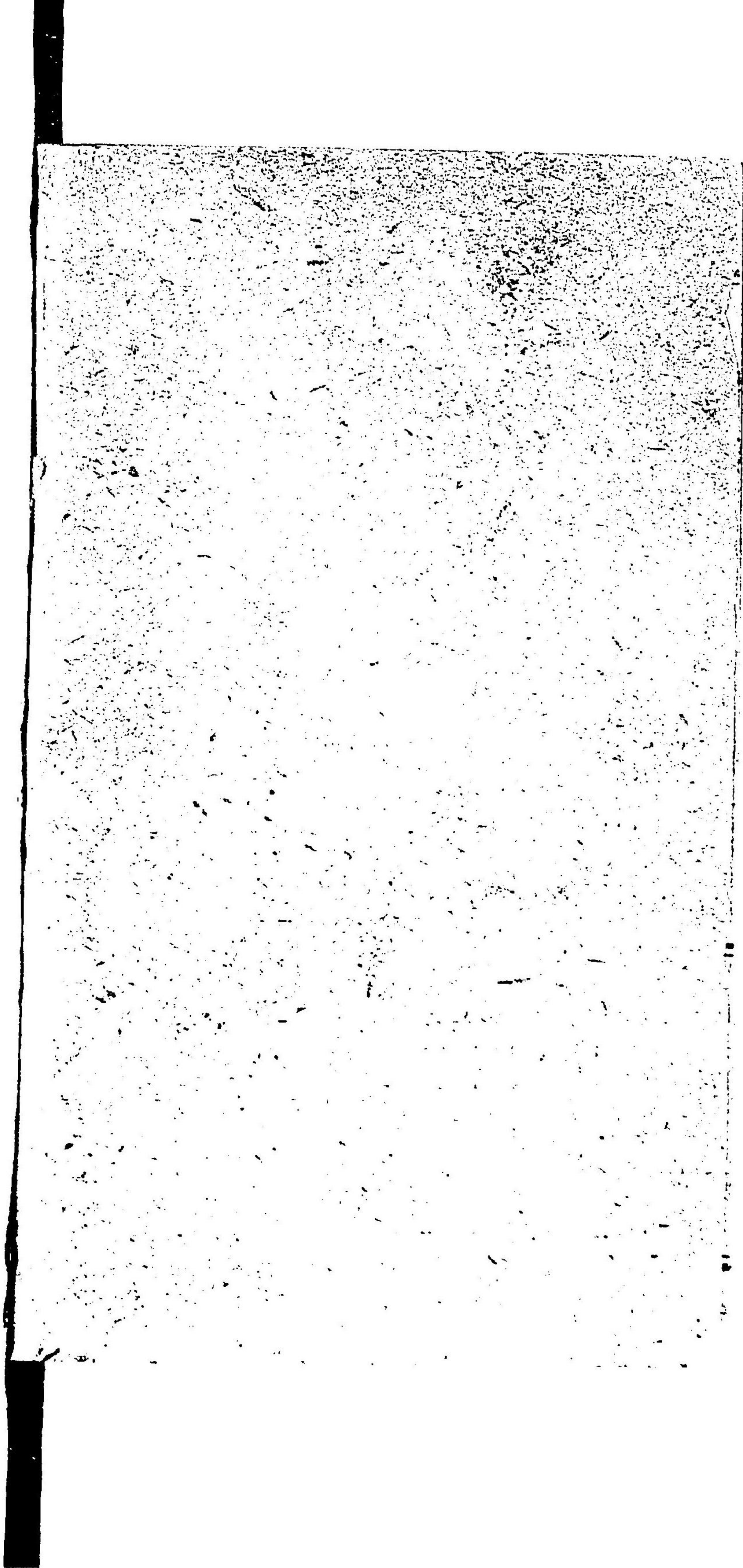
大阪心齋橋北詰四番地

大賣捌所

駸々堂本店

神戸楠公前

駸々堂出張店



特60
428

091926-000-0

特60-428

[石川五右衛門]

竹内新助

M21

DBP-0035

